

ホトトギス

十一月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
令和元年十一月一日発行
（百二十二巻第十一号）



風雅の小筥〔二十一〕

廣太郎

先月は知り切れ蜻蛉のようになって恐縮であるが、今回は先月の続きとして歳時記以外の俳句を詠む上での大切な書物、これは参考書と言った方が判り易いと思うが、もうお判りだろう。そう、日本語関係の辞書の類である。特に国語辞典は句会では必需品だろう。私が俳句会に出席するようになって気付いたのは、出席者の殆どが、大きな鞆に歳時記は勿論、結構分厚い国語辞典を入れて句会に臨んでいたのを思い出す。ただ、分厚いとは言え、やはり持ち運びにはあまり大型の辞書は重過ぎるので、どちらかと言うと国語辞典でも結構コンパクトで見出し語もそれ程多くないものであった。恐らく吟行ではその一冊で十分であろうが、欲を出せばもつと多くの見出し語が掲載されている辞書を持ち歩きたいとは人間正直なところである。そんな折、電子辞書なるものが市場に登場したのはもう何年、いや何十年前になるだろうか。やはり国語辞典といえ、こんな事を書くと言伝めいてしまうが、広辞苑がトップクラスの一冊として認識されていた。私の記憶が正しければ、その広辞苑の電子版というのが先ず市販されたのではないだろうか。最初は今に比べてかなり大型であったと記憶しているが、紙の書物に比べると重量は圧倒的に少なく、コンパクトな辞書よりも軽かった。勿論使い方は書物と違い、キーを押すという操作に戸惑った人も多かったようだが、結局今はすっかり定着しているだろう。しかしこの電子辞書の調べ方によつては、ちよつと混乱を招く事も事実である。とまで書いて、又来月に続く事をお許し頂きたい。

旬日記 汀子

平成三十年十二月四日 下萌句会

この晴を逃さぬ 整理 神無月
秋惜む心に添ふも添はざるも
神無月 依頼原 稿崩し つつ
草の花より立ち上がる大樹あり
冬紅葉色を深めて行くばかり

十一月五日 ロイヤル俳壇

旅立の朝の初霜 踏み分けて
落葉して落葉してまだ掃かぬ庭
親友の訃報 諾ふ寒さかな
北窓を塞ぎ親友との別れ
落葉踏みここより山路深くなる

十一月八日 清交社

木枯や 大事な友を失ひし
散り敷きて咲きて山茶花日和かな
木枯や 季節の推移 諾へる
消息を聞きて冬めく心かな
探したる一人の時間 冬に入る
明日は又雨の予報や冬の旅

十一月九日 工業倶楽部

なほ残る落葉の色はそのままに
冬に入る覚悟などなき如くあて
組船ありしこと心して冬に入る

十一月十日 秋の吟行会

お弁当いつ食べようか冬ぬくし
菊花展見しかと問はれをりにけり
美奇さんの話は尽きぬ冬ぬくし
来し記憶 辿り着きたる寺の冬

十一月十三日 大阪倶楽部

白米と酸茎があれば足る家居
入院と聞きぬ冬めく消息も
朝の間に上りてをりをぬ 初時雨
山茶花のこぼるる門を抜けて来し
旅多きことに冬めく思ひあり
又一 人 友 失 ひ し 初 時 雨

十一月十三日 綿業倶楽部

掃かぬまま木の葉の庭を楽しまむ
冬構して旅多き日々となる
風吹けばとどまる木の葉なかりけり
振り返る日々多かりし冬に入る
心にも冬構してをりしこと

十一月十五日 祝「円虹」三百号

志 継 ぎ て 記 念 の 年 迎 ふ
十一月十七日 中国ホトトギス同人会
冬の蝶 武士の化身の如く去る
三時間 小春の町へ降り立ちぬ
冬めくき旅に油断のありぞめし
道中の 黄葉を忘れたる紅葉

十一月十八日 中国ホトトギス俳句大会

城支へ 冬も 雲海 侍らせて
旅心外の寒さを身に纏ふ

十一月十九日 アサヒカルチャー

旅多き日々の一駒 冬ぬくし
旅に見し 刻々 深き冬紅葉
十一月二十日 有恒俳句会
鷹現れて天を領して行きにけり
稿債に追はるる師 走近づけて
帰り花には咲き満つる心なく
冬日和 帰路までつづきをりにけり
一人づつ 揃ふ人数 冬日和

十一月二十日 無名会

一面の枯葉を掃くは勿体なく
落ち尽くす枯葉を待つといふことも
単と分りしよりの存在に
枯葉掃くだけに庭師の来てくれし
考への二転三転 枯葉 踏み
単の空入れ替る夕べかな
庭を埋め尽くさん 枯葉 一大樹
十一月二十一日 夏潮句会

冬めくと気づきし朝の内のこと
祝ぎ心もて聞く話 冬日和
一昨日は落葉の庭でありしかな
冬めきて天気これより下り坂
ガソリンは満杯 冬の日の旅路
十一月二十二日 句会と講演の会

遠き旅 近き旅あり 石路の花
一樹より翔ち 単の空となる
石路の花より届きたる旅便り
降りさうで降らぬ 旅路の冬の雨

廣太郎句帳

廣太郎

平成三十年十一月四日 蕉心会

鰯雲 太平洋を狭めゆく
秋日和雲押してゆく押してゆく
水の綺羅日の綺羅に秋惜みけり
鷗二羽大秋晴に吸ひ込まれ
秋風の死角日の丸垂れ下り
朝寒を引き摺つてゐる日差かな
この紅葉にも塩害の及びしか
身に入むや門は修復されぬまま
山茶花の蕾は明日を夢見つつ
蕉像はペンキ塗り立てそぞろ寒
十一月二日 カトリック新聞選考吟
將軍家らしき気品の松手入

十一月三日 「円虹」巴心集出句

賀の年を迎へ輝く初明り
嫁が君にも輝きのありにけり
初富士の白く輝く車窓かな
御降も六甲輝かすものとして
御慶述べ声輝いてをりにけり

十一月四日 菅屋野分、青嵐合同句会

師弟句碑行間埋めて秋の声
爽やかに心豊かに司教ミサ
源平も駈けし野山の錦かな
海の綺羅山の彩り冬近し

十一月五日 刈谷市民俳句大会

刈谷てふ親しき距離に秋惜む
豊年を並べて句座の出来上がる
丹精を尽くす卓より秋の声

十一月六七日 「玄海」三百号記念大会

神の旅吾の旅祝ぎに締め括る
十一月八日 土筆会
終の花天国に近く咲く
日の恵み土の恵みに冬耕す
道迷ひつつ神渡纏ひつつ

京野菜育て百年冬耕す

十一月十日 ホトトギス社吟行会

龍子の絵飛び出しさうな冬日和
留守を守る力道山や神の旅
西の旅終へて出会ひし初時雨
弓川の文字シテを舞ふ小春かな

十一月十日 「俳句界」選者新春競詠

落葉載せ弓川の文字鎮もれり
本門寺茶屋に啜りし走り蕎麦
本堂の大屋根冬日撥ね返し
境内といふ七五三日和かな
弓川と虚子の絆や冬ぬくし
神渡都心の空を掃き清め
落葉踏む音本山の朝ぼらけ
冬日浴び力道山の墓静か

十一月十一日 日本伝統俳句協会関東支部大会

虚子句碑に言霊宿る小春かな
七五三僕もう歩けない抱つこ
冬帝に引つ張られゆく離陸かな
十一月十二日 朝日カルチャー若草句会
初霜に関東ローム層目覚め

山茶花の一片に日矢弾かるる
初霜の大地を覆ふ刹那かな
山茶花の散りて未来を引き寄せる
山茶花を敷いて大地は詩を紡ぐ
何もせぬことに暮れゆく文化の日

十一月十五日 北國文芸選考吟

本山の朝落葉掃く音に明け

十一月十五日 登高会

星空を収めて鷹の空となる
箒目を五線譜にして紅葉散る
鷹飛んで野鳥の森の戦けり
鷹舞うて棹の崩れてゆく渡り
電飾に後は任せて黄葉散る
冬ぬくしプラスバンドは天を衝く

十一月十六日 「あらうみ」近詠

秋潮の地球の果を確かめて
子規虚子を偲ぶ野山の錦かな
山近き大都市に居てうそ寒し
赤蜻蛉水平線を染め上げて
句碑の辺に紅葉且散る静寂かな

十一月十七、十八日 中国ホトトギス同人会、大会

山茶花の散るも古刹の景として
人形に挨拶されて冬ぬくし
天空の城冬空を攻め落とす
城までは徒歩一時間冬うらら
冬霧の霽れてゆく城明けてゆく
冬紅葉水禍の供華の如燃ゆる

十一月二十三日 ホトトギス社句会

隼の賛となりゆく刹那かな

石路の黄を寺の要として忌日
隼の飛翔蒼天押し上げて
鎌倉に忌心集ふ石路日和

十一月二十三日 青風会東京例会

句に集ふ縁勤労感謝の日
黄落の宝石箱となる都心
草枯を踏み犬散歩人闊歩

十一月二十八日 目黒学園句会

瑕瑾なき冬空飛機を吸ひ上げて
ボンネット猫の楽園日向ぼこ
切干や練馬の風に仕上りぬ
天童に心逸りて将棋の日
切干の乾く音聞く夕間暮れ
みちのくの日差切干躍らせて

十一月二十四二十五日 関西ホトトギス同人会、大会

散紅葉一枚にある矜持かな
冬の日を誘ひ出したる水音かな
光秀の縁小春日引き寄せて
童の目の冷たく潤む天井画
落柿舎の天蓋として大冬木
虚子押せし戸無く祇王寺小六月

十一月二十七日 若水句会

神の留守とて祈ること多かりし
花八手風に揺れざる矜持かな
慰めの色もて咲けり花八手
運命は神のみぞ知る神の留守
病室を淋しがらせず花八手
冬めきて告げる大事のありにけり
冬めきて思はぬ大事ありにけり
隙間張る三百年の武家の裔
冬めくや時の流れといふ不思議
来るものは拒まず湖北時雨かな
みちのくに静寂深めて隙間張る
冬めくや嘘を言はねばならぬ時

雑詠 廣太郎 選

夏帽に和服の虚子の思ひ出を 神戸 千原叡子
 参じ得ず虚子先生を偲ぶ夏 同
 曾祖母になると告げられ風薫る 同
 森は今青春時代風薫る 袋井 湖東紀子
 新緑のこぞりて光奪ひ合ふ 同
 十葉に日陰の匂ひありにけり 同
 海に散る花みな桜鯛となる 静岡 須藤常央
 海峽に揉まれたる色桜鯛 同
 あら汁は島のもてなし桜鯛 同
 聖鐘の風となりゆく麦の秋 宝塚 水田むつみ
 尖塔の見える果てまで麦の秋 同
 その果ては天空の城麦の秋 同
 舟渡御のくじに当りし引き舟に 福山 竹下陶子
 舟渡御にえらばれ禪まで一式 同
 この子らの母でありたる母の日よ 同
 敢闘もむなし汗とも涙とも 東京 高濱朋子
 満を持し腕にとまらせ蚊を叩く 同
 一面の植田を舐めて風わたる 同

俳諧の古茶のごときを愛しけり 熊本 岩岡中正
 白菖蒲人のごとくにふりかへる 同
 大河いま夏を育ててゐるところ 同
 とび出せる筈の切符の出ぬ薄暑 高知 橋田憲明
 閉づる店ふえて目抜ききの街薄暑 同
 大空に追はれ陸橋ゆく薄暑 同
 美しき鮎三枚に下ろすとは 神戸 後藤比奈夫
 妻あらば一際銀河濃きものを 同
 もて余しぬしは伸び切りたる日脚 同
 流水の白さを残し夏の川 同
 はらからの集ふ日の嵩夏蒲団 同
 蜘蛛のやかましき足揃ひけり 同
 灯のともり夜店の魔法始まりし 同
 ワインには強く甘酒には弱し 同
 灯にかざしルビーの指輪買ふ夜店 同
 丹波路やつづく緑の一人旅 長岡 安原 葉
 京めざし急くは光秀明易き 同
 一村の代田となりて明日を待つ 同
 一人待つ厨の広さそぞろ寒 東京 今井肖子
 ふくらはぎつる夜明け前そぞろ寒 同
 この空地何ありしやとそぞろ寒 同
 全身で受く艦橋の大南風 神戸 涌羅由美
 路地抜ける風もうかれて祭町 同
 少年が青年となる更衣 同

雑詠句評（十月号より）

雲海や西を端緒に大八洲 東京 田丸千種

雲海がいちめんに広がっている。その西を端緒として、大八洲、つまり日本列島が伸びているというのだろうか。天孫降臨の伝承のある高千穂の峰からの展望であろうか、私には鑑賞の力が及ばない。（純也）

日本の国生み神話を彷彿とさせるような雄大さがある。雲海はよく島根県の三瓶山で見ることが多いが、確かに島根県も多くの神話が語り継がれてきて、やはり雲海というのはそれだけ神秘的な情景なのではないだろうか。作者も雄大な雲海を見て、神話の世界に引き込まれたのだろう。（廣太郎）

ふるさとの風の味して新茶かな 龍ヶ崎 今橋眞理子

初夏の頃、新茶の便りを心待ちにしている方も多いかと思う。作者の故郷はお茶の栽培が盛んなのだろうか。それとも庭先に茶を栽培していて、ご家庭でお茶を作っておられるということも考えられるだろう。そんなふるさとのお茶が届きご実家のことを懐かしく思われたのだろう。ゆっくりと味わう新茶に、その土地の豊かな時間が感じられるようだ。「ふるさとの風の味」とおっしゃったところが詩的に感じられる。（佳乃）

新茶が届くと心がうきうきするものだが、作者の故郷でも茶の栽培をしていて、今年の新茶が送られてきたのである。長年故郷を離れて暮らしていると、色々な故郷の便りはやはり懐かしく、嬉しいものである。単なる新茶の味だけではなく「風」に着目して拡がりのある景が詠み込まれている。（廣太郎）

天地有情

冬の草住宅街といふ気品
 小寒に一枚羽織る恙かな
 虚子の齡いつしか超えて明易き
 稽古会有志健在明易し
 涼しさに歳を忘れてしまひたる
 豆飯の豆が真青でなき愁
 別離とはこんなものかや牡丹散る
 雨音に梅雨入りを思ふ一夜かな
 己がじし虚子偲びつつ露涼し
 明易や参じ得ざりし会のこと
 きのふより老いてけふあり新茶汲む
 新茶汲む余生幾許かは知らず
 花みかん匂へば近し誕生日
 裏山へ径細かりし花みかん
 天帝の心に回りぬし独楽に
 初霜や悠久の天綺羅星に
 短夜や夢儂くて目覚めけり
 ワープロの音夢と知り夏の朝

長岡 安原 葉
 同
 福山 竹下陶子
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 東京 河野昭彦
 同
 同 山田閨子
 同
 神戸 三村純也
 同
 東京 大久保白村
 同

夏座敷遺影変はらぬ笑まひかな
 句座涼し時に青虎の一喝を
 サングラス買ふはベニスに遊ぶため
 父の日を忘るることもまた供養
 梅雨明も本社移転の日も近し
 三島とは滝を神とも仏とも
 売り切れし粽長刀鉾なれば
 投げくれし頃なつかしき鉾粽
 花蜜柑月なき闇に濃く匂ふ
 濡れ色の一輪を剪る梅雨の庭
 奮発の鰻一人の誕生日
 清流の里とや栗の花匂ふ
 梅雨川の濁世つらぬきゆきにけり
 一木となるまで荒梅雨に佇てり
 黴の書の中の言葉は黴びてぬず
 黴の香の中に眠れる遺稿かな
 娘の逝きて早や一と年の臙かな
 窓開くるも開けざるもよし五月来る

同 今井千鶴子
 同
 相模原 木村享史
 同
 神戸 千原叡子
 同
 同 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同
 吹田 大橋 暁
 同
 宝塚 水田むつみ
 同
 神戸 浜崎素粒子
 同
 群馬 中杉隆世
 同
 西宮 本郷桂子
 同

虚子選